

〈特集 日本語および日本を比較する対照する対比する〉

仮名文字とハングルの発明、そして女流文学

金 鍾 徳

1. 記録好きな民族

日韓両国は一衣帯水といわれ、古代から頻繁に人物の交流が行われてきた。そこで多くの古代文化は朝鮮半島経由で日本に伝えられているが、近代以後の欧米文化は日本から韓国に伝播されている。特に『古事記』や『万葉集』など上代の文献にはあらゆる形で韓半島の文化が影を落としている。しかし、遣唐使の廃止以後は仮名文字の発明によって世界最古の長編小説といわれる『源氏物語』をはじめ、和歌、日記、随筆、物語など多数の女流文学が創作される。

日韓両国民は世界でも有数の記録好きな民族で、現在東アジアの漢字文化圏の中で両国だけが固有文字を使用している。第二次世界大戦中、日本軍捕虜の日記を分析していたドナルド・キーン氏によると、アメリカ軍は兵士が日記をつけることを固く禁じていたが、日本軍は禁止するどころか新年になると新しい日記帳を支給したそう。そして日本人は限界状況の中でも冷静に個人的な体験を書き残すことでよく話題になる。1985年8月羽田発大阪行きの日航ジャンボ機が約30分間迷走飛行の末、群馬県の山中に墜落した時、多数の乗客が遺言やメモを残したことで世界に膾炙された。また2007年3月にも大阪発高知行きの全日空機の前輪が下りず、高知空港に胴体着陸する事故が発生した際、兵庫県のある会社員が約二時間にわたる機内の緊迫状態を名刺の裏表にびっしりと書き綴ったことが知られている。その動機はともかく記録好きな日本人の伝統と無関係ではないと思われる。

韓国人も記録を残すことが好きな民族であるといえよう。新羅時代には漢字を借用した吏読式表記法で郷歌を書き、高麗時代までは漢文による詩歌や説話文学が創作されている。そして朝鮮王朝の宮廷女流文学は新しく創制されたハングルで書かれている。例えばユネスコに登録されている世界記録遺産は『訓民正音』(1997、ハングル)、『朝鮮王朝実録』(1997、1893巻、887冊)、世界最初の金属活字『直指心体要節』(2001年、1377年成立)、「承政院日記」(2001年)、「八万大蔵経板」(2007年)、「朝鮮王朝儀軌」(2007年)、「東医宝鑑」(2009年)、「日省録」(2011年)、「5.18 民主化運動記録物」(2011年)、「乱中日記」(2013年)、「セマウル運動記録物」(2013年)など11件もある。これはヨーロッパの国々を除いて最も多くの遺産が登録されている国であるようだ。

朝鮮(1392～1910)の宮廷女流文学と平安時代(794～1192)の女流文学を比較した研究は時代のずれや資料の制限があつてあまりなされていないのが現状である。管見に入った限りでは、戦前の崔南善は「日本文学における朝鮮の姿」¹で韓国文化と平安女流文学と

* 本稿は2013年8月1日に開催された東京外国語大学国際日本研究センターの夏季公開セミナーにおいて発表した原稿を修正・加筆したものである。

のかかわりを比較している。そして康米邦の「日本と朝鮮の王朝文学-時代思想と女流文学のかかわり」²、拙稿の「王朝女流日記の作者たち」、「『枕草子』と朝鮮王朝の宮廷文学」、「朝鮮王朝と平安時代の宮廷文学」³、金英の「韓日両国の宮中文学に表れた女性像研究」⁴、李美淑の「『蜻蛉日記』と『意幽堂関北遊覧日記』-日韓女流日記と旅」⁵などの研究がある。

仮名文字はハングルより5世紀以上早く成立しているので、固有文字で書かれた女流文学に限定して言えばもっと多くの作品が現存している。ここでは固有文字の発明によって誕生した日韓両国の宮廷女流文学に新しい光をあてて見たいと思う。特に平安時代の女流文学と朝鮮王朝の宮中体ハングルで書かれた『癸丑日記』、『仁顯王后伝』、『閑中録』⁶などと対比する。そして両国の宮廷女流作家は如何なる教養と批判意識をもって何を書き残そうとしたのかについて考えてみたい。

2. 日韓最大の発明は仮名文字とハングル

周知のごとく日韓両国はインド、中国に発する仏教、儒教、漢字などさまざまな文化を共有している。特に日本に伝わった大陸文化は百済などの朝鮮半島経由が多いということは、文物だけでなく言語文化的にも深い絆で結ばれていると推定される。例えば『古事記』応神朝には百済から派遣された和邇吉師が『論語』十巻、『千字文』一卷などをもたらしたことや、『日本書紀』欽明朝十三年条に百済聖名王から釈迦佛の金銅像と経論他が贈られたことなど、文化交流の記録は枚挙に暇がないくらいである。

上古の時代、中国以外の漢字文化圏の諸国では固有文字がなかったために漢字を借用して固有語を表そうとした。日本の万葉仮名、新羅の郷歌式表記法（郷札、吏読、方言）、ベトナムの喃字（チュノム）などはすべて漢字を借用した固有語の表記法である。日本は平安時代まで、韓国は朝鮮時代まで、ベトナムは二十世紀にローマ字表記が定着するまで、漢文とともに公式表記法として使用されていた。夙に小倉進平は郷歌式表記法について、「郷歌の漢字使用法は我が万葉仮名の使用法と其の軌を一にしている」⁷と指摘し、日韓両国は仮名や諺文（ハングル）が製作される以前から漢字を巧みに利用して自国語を書き表していたことを究明している。しかし、漢字文化圏の国々が伝承歌謡などの細やかな感情

1 六堂全集編纂委員会『六堂崔南善全集』第9巻、玄岩社、1974年

2 康米邦「日本と朝鮮の王朝文学—時代思想と女流文学のかかわり」（『平安朝文学研究』第二巻第九号、早稲田大学国文学会平安朝文学研究会、1980年9月）

3 拙稿「王朝女流日記の作者たち」（『解釈と鑑賞』至文堂、1997年5月）

『枕草子』と朝鮮王朝の宮廷文学」（『国文学』学燈社、2007年6月）

『朝鮮王朝と平安時代の宮廷文学』（『王朝文学と東アジアの宮廷文学』竹林社、2008年）参照

4 金英「韓日両国の宮中文学に表れた女性像研究」（『日本学報』韓国日本学会、2005年11月）

5 李美淑「『蜻蛉日記』と『意幽堂関北遊覧日記』—日韓女流日記と旅」（『国文学』学燈社、2006年7月）

6 丘仁換編『癸丑日記』新元文化社、2003年

『仁顯王后伝』新元文化社、2003年

『閑中録』新元文化社、2002年、以下本文の引用は同じ冊の頁を示す。筆者訳。

7 小倉進平『郷歌及び吏読の研究』京城帝国大学、近澤商店、1929年、p.32

『増訂補注朝鮮語学史』刀江書院、1964年、p.304

を表現するために漢字を借用した表記法を工夫したものの、漢字で固有語を自由に表現することはたいへん不便であった。

そこで日本では平安初期に万葉仮名を基にして新しく仮名文字が発明され、韓国では新羅の滅亡とともに郷歌式表記法が廃れた後、朝鮮王朝四代の世宗王（1418～50）の時代になってハングル文字（訓民正音）が創制される。『朝鮮王朝実録』世宗25年12月条には⁸、新しく作った諺文二十八字はどんな文字も俚語もたやすく書けて、簡単でありながら転換が無窮なので『訓民正音』と名づけたとある。この『訓民正音』は世宗大王を含めて集賢殿の学者たちによって創案されたもので、漢字とは異なる全く新しい表記法であった。『訓民正音』の冒頭には「わが国の語音は中国と異なり、漢字と相通じず。故に愚民は言いたいことがあっても、それを書き表せない者が多い」⁹とあって、新しく二十八文字を創制した必要性が力説されている。最近ハングルの成立年代をめぐって学説が分かれているようだが、その基本的な字形が創制されたのは旧暦の1443年12月30日のことである。集賢殿（宮殿の中にあつた学問研究所）の漢文学者たちはその頒布を猛烈に反対したが、世宗王は三年後の1446年に『訓民正音』を創刊する。

ところでハングル創制にもっとも寄与した申叔舟（1417～75）は集賢殿学者出身で、ハングルの音韻を研究するために当時遼東に配流されていた明の翰林学士黄瓚を十三回も訪れたと言われる。そして1443年、朝鮮通信使の書状官として室町時代の京都を訪問し、日本の歴史や日本事情、仮名文字の活用などを観察している。また二度目の領議政（朝鮮時代の最高官職）になった1471年、成宗王（1469～94）の命を奉じて『海東諸国紀』を撰進する。『海東諸国紀』には日本と琉球の歴史、地理、風俗、言語などを克明に記されているが、特に日本国紀「国俗」には日本の風俗や仮名文字の使用について次のように述べている。

○飲食には漆器を用う。尊処には土器を用う。一用うれば即ち棄つ。筋有り。匙無し。
○男子は短髪して之を束ぬ。人は短剣を佩ぶ。婦人は其の眉を抜きて其の額に黛す。背に其の髪を垂れて之に続け、以て髻す。其の長きは地に引く。男女冶容の者は皆な其の齒を黒く染る。○凡そ相遇うときは蹲坐して以て礼を為す。若し道に尊長に遇えば鞋笠を脱ぎて過す。○人家は木板を以て屋を盖う。唯天皇・国王の所居および寺院は瓦を用う。○人は喜びて茶を啜る。路傍に茶店を置きて茶を売る。行人銭一文を投じて一碗を飲む。人居は処処千百聚を為し、市を開き、店を置く。富人は女子の帰るところ無き者を取り、衣食を給し、之を容飾し、号して傾城と為し、過客を引き、宿に留め、酒食を饋りて直銭を収めしむ。故に行く者は糧を齎さず。○男女と無く皆其の国字を習う。国字は加多干那と号す。凡そ四十七字なり。唯僧徒は經書を読み漢字を知る。¹⁰

⁸ 国史編纂委員会『CD-ROM 国訳朝鮮王朝実録』韓国学データベース研究所、1995年

⁹ 姜信沆『訓民正音研究』成均館大學校出版部、2003年、p.576。筆者訳。

¹⁰ 申叔舟著、田中健夫訳注『海東諸国紀』岩波書店、1991年、p.118

申叔舟は京都の男女が仮名文字を使って自由に意思表示をしているのを見ているから、帰国して世宗王の『訓民正音』創刊に何らかの意見を開陳しただろうと思われる。しかし、『朝鮮王朝実録』に仮名文字の使用に関わる記事は何も書いていない。当時世宗王は1443年にハングルを創制したものの、集賢殿副提学だった崔萬理の上疏を始めとして、士大夫漢文学者たちの強い反対にぶつかっていた。このような状況だったからハングル公布に反対する史官の漢文学者には申叔舟の陳言が受け入れられず、『海東諸国紀』に日本の風俗や仮名文字の使用状況などを書いたのではなかろうか。

申叔舟は臨終の際、当時の成宗王に「願わくは国家、日本と和を失うことなかれ」¹¹という遺言を残したそうだ。この逸話で彼がいかにか日本との外交・和平を重視していたのかが分かる。それから約120年後に、豊臣秀吉によって壬辰倭乱・丁酉再乱（文祿慶長の役）が勃発する。朝鮮の朱子学者であった姜沆（1567～1618）は日本軍の捕虜となって1598年に京都の伏見城に移送され、藤原惺窩に朱子学を教えている。姜沆は捕虜生活の経験と日本の風俗地理などを『看羊録』（1656）に纏めている。彼は倭僧からももらった本をハングルに翻訳したこと、仮名文字の使用状況などを次のように述べている。

弘法大師は讃岐の人である。中国を経て天竺にまで行って仏法を学んで帰ったので、この国の人には生仏のように敬う。大師は文字（漢文）が読めない倭人のために、方言などを集めて倭諺（仮名）の四十八文字を作り出した。漢字の部分はわが国の吏読のようで、漢字が混じっていない部分は諺文（ハングル）のようだ。彼等が文字を知っているということは仮名のことであって、漢文ができるということではない。但し倭僧の中には漢文に慣れているものが多く、性情も普通の人と違うところがある。¹²

姜沆は捕虜とはいえ、仮名文字の使用実態を正確に把握していたようである。申叔舟と姜沆は通信使と捕虜という極端の身分差があるにも拘らず、仮名文字と漢字の位相についてほぼ同様に認識していたようである。すなわち、申叔舟は仮名文字をハングル創制のモデルとして、姜沆は諺文（ハングル）と全く同じ位相の文字として見受けていたのである。

日韓両国の漢字漢文と新しく発明された固有文字に対する認識は共通点が多い。日本では漢字を男文字といったのに対して、仮名文字は女文字、女手、女仮名、子供文字などと言われてきた。朝鮮のハングルも諺文、女文字、子供文字などと蔑まれてきた歴史がある。しかし、両国国語の音声に合う固有文字が発明されなかったら、宮廷女流作家による日記や随筆、詩歌、物語などの微妙な自然描写や人間の心理描写は不可能であったと思われる。

3. 平安時代における女房の教養

平安時代と朝鮮王朝はそれぞれの社会制度や文化が異なるだけに、宮廷文学の作者とな

¹¹ 柳成龍 著、南晩星 訳 『懲愆録』玄岩社、1973年、p.22。筆者訳。

¹² 姜沆著、李乙浩 訳 『看羊録』大洋書籍、1972年、p.206。筆者訳。

った女房（宮女）制度も似ていて違う点が多い。『養老律令』「後宮職員令第三」¹³には、皇后の下に妃二員、夫人三員、嬪四員があり、後宮でさまざまな仕事をする後宮十二司や采女などの官職と職務が定められている。後宮の女官は出身や身分によって上臈、中臈、下臈の品格に分類され、准従五位から准従七位までの官位が授けられた。宮人の職員（内侍司）は尚侍二人、典侍四人、掌侍四人、女嬪一百人で、蔵司の女官はそれぞれの職務によって服装も区別されていた。平安時代の律令では中国や韓国にある宦官制度を受け入れず、宮中におけるすべての雑務は内侍司（女房）が取り仕切っていたようである。

しかし、これらの後宮制度は平安時代になるとすたれて、後宮には后（中宮）、女御、更衣、尚侍、御息所、御櫛笥などがあって、後宮十二司も内侍司以外はほぼ有名無実で、多くの女房が宮中で働くようになる。普通女房といえば宮中で働いている女官のことであるが、上流貴族の家に仕えた女性も女房と総称され、宮廷女流作家の清少納言や紫式部なども女房の一人であった。

平安時代に宮廷女流作家となった女房は受領層の中流貴族出身が多く、宮中や院中に部屋を与えられ、雑務とともに仕えている主人の家庭教師や秘書の役割もしていた。宮廷作家となった女房は後宮サロンを指導する学問・芸能などの教養を備えた女性で、和歌や和文ばかりでなく漢詩漢文にも優れた素養のある才女であった。彼女たちは主家の男性と交際をしたり、結婚して退職することもできたし、一度結婚して離婚・死別した女房もいた。すなわち、平安時代の女房は朝鮮王朝の宮女に比べて、恋愛や結婚、退職などに自由があったようだ。

平安時代は宮仕えに対する社会的通念は必ずしも好意的ではなかったようだが、清少納言などはかえって宮中で働いていることを誇りに思っていた。清少納言は和漢の学問に通じ才気煥発で勝気な才女で、993年ごろから7年間、一条天皇の皇后定子に仕えたキャリア・ウーマンであった。『枕草子』「生ひさきなく」（22段）には、将来の見込みのない平凡な結婚生活を続けるよりは宮仕えをして内侍のすけとなり、広く世の中に接し学問と教養を身につけた方がいいと書いている。そして清少納言は「宮仕へする人を、あはあはしうわるき事に言ひ思ひたる男などこそ、いとにくけれ」¹⁴と述べ、宮仕えする女性を軽薄だと悪く思う男性に対して強く反発している。また宮仕えをしていると天皇から下賤の者にまで顔が知られるようになって、男と対等に張り合いながら宮中で勤めることを誇りに思っている。そして[一本]の24には、宮仕えすべき候補として、まず内裏、後の宮、親王と内親王家、齋院、春宮の女御などを取り上げ、宮中で典侍となって天皇と上級貴族を取り持つことが最も理想的な女性の職場であると思っている。清少納言は典侍にはなっていないが、宮中で皇后定子に仕えるという経験があったから『枕草子』に書いてあるような美意識を確立することができたと思われる。

藤原道綱の母は女房ではなかったが、受領出身で夫兼家との儂い結婚生活と一夫多妻制

¹³ 井上光貞 他校注 『律令』（「日本思想大系」岩波書店、1972年）p.197

¹⁴ 松尾聡 他訳注 『枕草子』（「新編日本古典文学全集」小学館、2007年）pp.56～57。以下本文の引用は同じ冊の頁を示す。

の苦悩を『蜻蛉日記』に告白している。彼女は「きわめたる和歌の上手」¹⁵な歌人で、兼家との夫婦関係は円満ではなかったらしい。『百人一首』にも載っている「嘆きつつひとり寝る夜の明るる間はいかに久しきものとかは知る」は二人の関係を象徴している。同じく受領家出身で中宮彰子に仕えた和泉式部は、情熱的な恋愛歌を詠んで中古三十六歌仙の一人に数えられている。紫式部は日記の中で和泉式部を次のように批評している。

歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。(中略) 恥づかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず。¹⁶

紫式部は和泉式部が手紙などを「おもしろう書きかはしける」人であるが、浮気な行動は倫理に悖ると書いている。そして和泉式部を自然に歌を詠む歌人としてその歌才を認めながらも、一方ではこちらが引け目を感じるくらい最高の歌人ではないという厳しい批判を交えている。清少納言は『枕草子』の「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」(78段)、「雪のいと高う降りたるを」(280段)などの段で、男性貴族や中宮とも漢文の知的遊戯を楽しんでいたことを書いている。『紫式部日記』には清少納言についても、「したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」(p.202)と厳しい言葉で批判している。紫式部はこのように清少納言の才能を認めながらも強いライバル意識を持っていたようだ。

紫式部は女房たちを痛烈に批判しながら、一方では自分の学識をほこりにしていたようである。『紫式部日記』には、一条天皇が女房から『源氏物語』を聞いて「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」(p.208)と言って、紫式部の豊かな学識を賞賛したことを書いている。紫式部はこれが原因で「日本紀の御局」というあだ名がつけられ、揶揄されたことについても自己弁解をしている。まだ幼いころ父藤原為時が弟の惟規に漢籍を教えていた時、そばで聞いていた紫式部が不思議なほど早く覚えてしまったので、「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」(p.209)と父を嘆かせた逸話を紹介している。そして宮中に入った紫式部は「一といふ文字」も書いて見せることなく、屏風に書いてある簡単な文句も読めないふりをしていたが、中宮彰子に『白氏文集』楽府二巻を人目を避けて講読したとも書いている。すなわち、紫式部は他人の学術的な態度を非難しながら、自らは中宮に『白氏文集』を教えるなど相矛盾した行動をとっている。これは紫式部がさりげなく自分の漢学を自負して書いたものといえよう。

平安貴族女性の教養は習字、和歌、音楽が基本で、その他に絵合、香合、貝合、物語合、囲碁、双六などの娯楽を楽しんだようだ。『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」(21段)には、藤原師尹が娘の宣耀殿女御に『古今集』二十巻を全部暗誦させた逸話が紹介されている。

¹⁵ 橘健二 校注『大鏡』(「新編日本古典文学全集」小学館、2000年)p.250

¹⁶ 中野幸一 校注『紫式部日記』(「新編日本古典文学全集」小学館、1994年)p.201。以下本文の引用は同じ冊の頁を示す。

村上の御時に、宣耀殿の女御と聞えけるは小一条の左の大殿の御むすめにおはしけると、誰かは知りたてまつらざらむ。まだ姫君と聞えけるとき、父おとどの教へきこえたまひけることは、『一には御手を習ひたまへ。次には琴の御琴を、人より異に弾きまさらんとおぼせ。さては古今の歌二十巻をみな浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ』となむ聞えたまひけると、聞しめしおきて (pp.53~54)

藤原師尹は娘芳子が宮仕えする前に習字、琴の御琴、『古今集』二十巻を学問として訓育したのである。村上天皇は宣耀殿女御（藤原芳子）が『古今集』を暗記していると聞いて、几帳を引き立てて詞書と歌の初めの部分を言って続きを尋ねたところ、二十巻のうち一首も間違ふところがなかったという。このエピソードは『大鏡』の師尹伝にも取り上げられ、和歌が儀礼や恋愛の必須教養で、独詠、贈答、唱和などの詠歌方法と教養は物語の人物造型とも不可分の関係であったことを物語っている。また『枕草子』「うらやましげなるもの」(152段)には、「字よく書き、歌よくよみて、もののをりごとにもまづ取り出でらるる」(p.278)人もいたし、一方では「まことに難波わたり遠からぬ」(p.279)くらい習字が下手な年長者の女房もいたようだ。それから琴や笛なども他の人より早く上手になりたいと思うのは当然であるとも書いている。

もともと習字は漢詩の名句を書く練習であったが、平安時代の女性は和歌を書き流したのである。『古今集』の仮名序には「難波津」と「朝積山」の二歌を、「歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の初めにもしける」¹⁷とある。『源氏物語』帚木巻で、左馬頭は体験した浮気な女が、「うち詠み、走り書き、掻い弾く爪音、手つき口つき」¹⁸などすべて上手で、人柄もよかったと回想している。しかし、左馬頭は理想的な女性で和歌や習字、音楽などの教養は完璧に満たしていても浮気な女を警戒すべきだと語っている。『源氏物語』若紫巻で、尼君は源氏に若紫がまだ十歳ばかりの子供で、手習歌の難波津もまだ連綿体にうまく書けないと返信している。源氏はそのような若紫を二条院に迎え、理想的な女性に育て上げる第一歩としてまず手習や絵などを教えている。また梅枝巻には、源氏が女手を習っていた時に六条御息所の走書きした一行を手に入れて練習したことを述べ、当代に筆跡の優れた女性との人間関係が語られている。すなわち、洋の東西を問わず手紙はコミュニケーションの道具であったが、平安時代にはその人の筆跡から人格や美意識まで推定したのである。

音楽も女性の必須教養で物語には頻繁に催される管弦の遊びや女楽などが語られる。『紫式部日記』には、敦成親王（御一条天皇）誕生の産養いの余興に、「御前の御遊びはじまりて、いとおもしろきに、若宮の御聲うつくしう聞こえたまふ」(p.158)とあって、管弦の遊びが開催される。また紫式部は実家に戻って自分の過去を反省し、風の涼しい夕暮れに「琴をかき鳴らし」、「箏の琴、和琴、しらべながら」(p.203)、楽器をすすけた部屋に放置

¹⁷ 小沢正夫 校注『古今集』（「新編日本古典文学全集」小学館、1994年）p.19

¹⁸ 阿部秋生 他校注『源氏物語』1（「新編日本古典文学全集」小学館、1998年）p.77。以下『源氏物語』本文の引用は巻、冊、頁数を示す。

して塵が積もっていると書いている。そして敦良親王五十日の祝いには、「四条の大納言拍子とり、頭の弁琵琶、琴は口、左の宰相の中将笙の笛とぞ」(p.221) という構成で管弦の遊びが催される。

『源氏物語』末摘花巻で、源氏は末摘花が琴だけが楽しみであると聞いて興味を持つようになる。また明石巻では晩秋の季節に、源氏は都からもっていった琴をかき鳴らし、明石の君が演奏する箏の琴を聞いて結ばれる。そして若菜下巻には、源氏四十七歳の正月、朱雀院五十の賀宴を前に六条院で女楽が催される。明石の君は琵琶、紫の上は和琴、明石の女御は箏の御琴、女三宮は琴をもって協演する。すなわち、これらの楽器はそれを奏でる登場人物の象徴となっており、女性の性格や人物像が造形されている。

他にも平安時代の女性は、主に室内で囲碁や双六、弾碁、香合、物合、雛遊びのような娯楽を楽しんだ。一方、男性の室外娯楽には蹴鞠、競射、鷹狩などがあつた。そして男女共通の遊びとしては歌合、物語合、絵合、韻塞ぎ、偏つぎなどの文学的遊戯があつて、学問的な知識がなければ不可能な娯楽が流行っていた。このような勝負の後には、負けた方が罰として和歌を詠んだりしたので文学的教養が必須であつた。平安時代の貴族たちは様々な遊びを楽しんだが、物語文学に画かれる遊びは単純な娯楽ではなくて、それを催す場所や勝負の結果によって人間関係が形成された。特に虚構の物語などに表われた娯楽は単純な物合せで終わることなく、勝利を収めた方が政治的にも優位な立場になる。たとえば、『源氏物語』絵合巻で、斎宮女御方は弘徽殿女御方との絵合で勝つことによって、絵の好きな冷泉帝に寵愛され中宮となる。

平安時代の女性は習字や和歌、音楽などを基本的な学問として収めていた。これらは必ずしも女性だけの学問でなく男性貴族の教養でもあつて、色好みの条件ともいえよう。在原業平や光源氏などの色好みは、みな和歌や音楽、習字、舞などの諸芸能に優れた資質をそなえた風流士であつた。また当時の娯楽であつた囲碁や双六、物合、歌合、物語合、絵合なども和歌や習字など文学的教養が必須条件であつた。すなわち、平安貴族の女性教育は、すばらしい男性と交流できる教養を身につけることであつたともいえよう。

4. 朝鮮王朝における宮女の学問

朝鮮王朝の宮女(内人、宮人)は王と王妃に仕えた内命婦の総称で、尚宮、内人、ムスリ、房子、医女などの職掌についた。朝鮮末期に成立した『大典会通』吏典内命婦¹⁹によると、尚宮以下は宮人職に属し、正五品から従九品までの位階が授けられ、それぞれの職務が決まっていた。朝鮮王朝時代の宮女は公務で官僚の取次ぎを除いては、王と宦官以外の男性との接触は禁じられていた。また本人の重病や仕えた人が亡くならない限り宮中から出ることさえ許されなかった。

宮女は主に中人(両班と常民の中間層)階級の出身であつたが、七歳ごろ宮中に入って宮中法度、ハングル、『千字文』、『大学』、『小学』などを習い、宮中儀礼に深い知識を持つ

¹⁹ 高麗大学民族文化研究院『大典会通』CD、東方メディア、2007年

ことになる。そして正五品の尚宮になるまでに35年もかかり、そのトップは提調尚宮と言われた。ところが、宮女が運良く王の恩恵をこうむると直ちに従四品淑媛となり雑務から解放され、専ら王に奉仕する後宮となる。『大典会通』史典によると、内侍府は去勢された男子宦官の官僚機構で官位は従二品尚膳から従九品尚苑まであって、宮中で王の食事監督、命令の伝達、門番、掃除などはすべての雑務は内侍の務めと定めている。

朝鮮王朝は崇儒排仏が国家の基本理念であったので、女性教育は儒教倫理による三綱五常や三従之道、礼儀作法などが強調された。世宗13年(1431)に編纂された『三綱行実図』には韓国と中国の忠臣、孝子、烈女を35名ずつ選んで、その身持ちについて絵と説明がつけられている。そして成宗12年(1481)時代には『三綱行実図』がハングルに翻訳され礼儀作法を教える教科書として広く読まれるようになる。

17世紀の初めころ、朝鮮中朝の天才的な女流詩人であった許蘭雪軒(1563~89)の詩集『蘭雪軒集』が明国の詩人朱之蕃によって刊行された。それから約200年後、朝鮮後期の実学者朴趾源(1737~1805)が親戚兄の進賀使兼謝恩使に随行して北京に行った時、許蘭雪軒の詩集を取り上げ、「そもそも閩中の女性が漢詩を書くことはあまり褒めるべきことではないが、この外国の一女性の名前が中国にまで伝わったから名誉であると言わざるを得ない」²⁰と書いている。すなわち、朝鮮王朝時代の士大夫(両班)漢文学者は許蘭雪軒の漢詩が中国にまで知られていたことを否定的に見ていたのである。

『癸丑日記』は末尾に「内人たちがしばし記録する」(p.139)と書いているから作者が宮女であることは確かだが、作者の家系や教養などについてはほとんど知られていない。但し宮中の有職故実や典雅な宮中体で書かれた作品の内容から作者はかなり教養の高い宮女であると推測される。

『仁顯王后伝』も王後の波乱万丈な生涯を近くで見ている学識豊かな宮女によって書かれたものと推定されている。『仁顯王后伝』の主人公である仁顯王后は生まれつき容貌がきれいで、そのうえ親孝行で縫い物や機織などすべて敏捷であったので、王後の仲父はいつも「この子があまりにも賢くて綺麗なので命の長くないことが心配される」(p.15)とあって、「佳人薄命」という故事を想起している。

『閑中録』の作者は宮女ではなく東宮妃の恵慶宮洪氏であり名門の家で生まれ幼い時からハングルを習ったと述べている。恵慶宮洪氏は仲母に「諺文を教えてもらい、格別に物事をご指導くださったので、私が母親のように敬った」(p.17)と書いている。そして東宮妃に選ばれて別宮で滞在していた時、「英祖大王が『小学』を賜ったので毎日父親に教わる」(p.28)とある。舅英祖が自ら書いた『訓書』も賜ったので、作者は宮中の礼儀作法を身に付けたと書いてある。すなわち、朝鮮王朝における普通の貴族女性の教育は主に儒教倫理とハングルで、東宮妃や宮女は宮中に入ってから漢文を習ったようである。

朝鮮時代の妃嬪や貴族の女性は自分の書いた文章が閩房の外に出ることを極度にタブー視したようである。特に宮中で目撃した王や王妃に関わる秘密を書き残すことはひょっと

²⁰ 朴趾源『熱河日記』II「避暑録」民族文化文庫刊行会、1982年、p.146

して筆禍事件に巻き込まれる恐れがあって、王朝実録以外の個人的な日記、随筆などの記録はあまり残っていない。『閑中録』の冒頭には、恵慶宮洪氏が宮中から実家に送った手紙を父の洪鳳漢はすべて水に洗ってしまったと書かれている。恵慶宮洪氏は自分の手跡が何も残っていないので、実家の姪（洪守栄）がいつも「何か文章を書いていただければ家の宝物になりましょう」（p.14）と言っていたそう。しかし恵慶宮洪氏は書く暇もなく実行できないでいたが、還暦を向かえてからやっと波乱万丈な生涯を思い出されるままに記録したと述べている。また洪氏は夫の思悼世子が英祖大王によって米びつに閉じ込められ飢え死にされた悲劇はあまりにも衝撃だったが、その気持ちを百のうち一つも書けなかったと述べている。また『癸丑日記』には、癸丑年以後の「冷遇・無道・不孝な行為などをすべて書き切れず、一万分の一ぐらいでも記録しておく」（p.136）と書いている。すなわち、『癸丑日記』や『閑中録』の作者は、随筆の中で書いているのは自分が経験した悲惨な事件のごく一部分に過ぎないということを強調している。このような記述は『土佐日記』の冒頭で、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」と述べ、末尾で「忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ」²¹とある発想とよく似ていると思われる。

朝鮮王朝の普通の女性教育は儒教倫理とハングルで、宮女は宮中に入ってから宮中諸法度や漢文を習ったようである。宮女たちが実人生の経験をハングルで書いたのが『癸丑日記』、『仁顯王后伝』、『閑中録』などであった。すなわち、朝鮮王朝の宮女は宮中で想像を絶する事件を偶然目撃し、筆禍事件にさらされるのを覚悟して筆を執ったのではないかと思われる。

5. 平安時代の女流文学

日韓両国の宮廷女流作家たちは漢文でなく、仮名文字とハングルで実人生の特異な体験や美意識を書き残している。両国とも作家となったのは中流貴族出身の女房や宮女、後宮の女性であった。彼女たちは宮中で起きた出来事、人生の苦悩、宮仕え観、同僚に対する批判、上流貴族との関わりなどを日記や随筆、物語のジャンルで書いている。そして両国の宮廷文学には微妙に温度差があって、平安時代の宮廷文学はわりと自由に宮仕えの体験を描いているが、朝鮮王朝の宮廷文学には儒教倫理や宮中の法度などに縛られているといえよう。

平安時代の撰閑家は後宮に入内させたわが娘のために感性豊かな才女を集めて文学サロンを形成し、帝の寵愛を受けられるように祈願した。そして入内した娘が運良く中宮に立ち、生まれた皇子が東宮となり即位すると外戚として朝廷の柱石として一身の名誉とともに一門の栄華が保証された。そこで宮廷作家となった女房は中宮や女御に和漢の学問や教育に責任を持って和歌を詠んだり日記や随筆、物語などを書いたりした。そこで女流作家となった女房たちにとって、宮仕えの体験は日記や随筆、物語などを書く文学的な基盤に

²¹ 松村誠一 校注『土佐日記』（「新編日本古典文学全集」小学館、2000年）p.66

なったといえよう。

道綱母は宮仕えをした女房ではなかったが、撰閲家の夫藤原兼家との結婚生活を自叙伝風に書いたのが『蜻蛉日記』である。最初の女流仮名文学といわれる『蜻蛉日記』には、美貌と才能に恵まれた作者が954年から約20年間、兼家の妻として不安定な夫の愛情と自尊心の間に彷徨するが、子育てや自然にこもったりして徐々に苦悩を乗り越えていく心理が告白されている。作者の苦悩と深層心理は有名な冒頭の一文に涵蓄されている。

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。(中略) 世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、²²

作者は自分の儂い過去半生を詠嘆しながら、荒唐無稽な古物語などを読んで、自分の実人生を書いた日記の方がもっと数奇な運命であると思っている。冒頭の一文は上巻の終わりの「なほものはかなきを思へば、あるかなきかのこちするかげろふの日記といふべし」(p.167)とある文章と首尾相応して、作者自身の半生が物語よりもはかない人生であったと語られる。『閑中録』など朝鮮の宮廷文学には「政治的恨み」が背景に敷かれているが、『蜻蛉日記』には一夫多妻制という社会制度の中で夫兼家に対する「個人的な恨み」が告白されているといえよう。

最初の随筆文学といわれる『枕草子』には、宮中の有職故実、人事、自然と四季の情趣などに対して鋭い観察力をもって「をかし」の美意識が描かれている。しかし、清少納言は中関白家という一家一門の興亡を近距離で見ているにも拘らず、凋落する過程より栄華の絶頂期にあった中宮定子と主家を描いている。そこで鈴木日出男は「中関白家一門が零落して定子自身が孤立無援の存在になった時点についても、その歴史的必然にふれることなく、もっぱら陰影のない宮廷美として描き出す」²³と指摘し、聖代的な美の局面局面を累積させていると述べている。すなわち、『枕草子』は『仁顕王后伝』など朝鮮の宮廷文学に比べて寂しい雰囲気を意図的に明るい表現で礼讃し、まるで斜陽の美学ともいべき自意識が働いているといえよう。

和泉式部は996年ごろ、和泉守橘道貞と結婚して小式部を出産するが、1001年ごろから翌年まで弾正尹為尊親王に愛される。『和泉式部日記』には、1002年為尊親王が亡くなって、翌年の1003年から同母弟の敦道親王との恋愛を記している。和泉式部は1007年敦道親王が没した後、道長にスカウトされ、すでに紫式部などが勤めていた中宮彰子に出仕する。またその翌年には藤原保昌と結婚して任地の丹後国へ下るという多情な女性であった。『和泉式部集』にはこのような和泉式部の男性遍歴を知っている藤原道長が戯れを仕掛けると、当意即妙に反発する和泉式部の歌が載っている。ある日、置き忘れられた扇が和泉式部の

²² 木村正中 他校注『蜻蛉日記』(「新編日本古典文学全集」小学館、2000年)p.89。以下本文の引用は同じ冊の頁を示す。

²³ 鈴木日出男『清少納言と紫式部』放送大学教育振興会、1998年、p.145

ものと分かるや、道長がそれに「うかれ女の扇」と書いているのを見て、和泉式部は扇のかたわらに「越えもせむ越さずもあらん逢坂の関守ならぬ人などがめそ」（226番）²⁴と書き添えた。男女の恋は逢坂の関を越えることによく比喻されるが、和泉式部は関守でもない道長に口出しされることはないと見事に切り返している。現代から見ても千年前の和泉式部の自由な恋愛遍歴には目を見張るものがあると思われる。紫式部も日記の中で「和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」と述べたり、「恥づかしげの歌詠みやはおぼえはべらず」と厳しく批判しながらも、一方では「歌は、いとをかしきこと」（p.201）と褒めている。平安時代の宮中に勤めるの女房の選抜基準は、倫理道徳より和歌や音楽、習字などの教養がもっと重要視されていたのである。

紫式部が一条天皇の彰子中宮に出仕したのも夫藤原信孝と死別し、女賢子を育てながら『源氏物語』を書き始めて四年目になる1005年12月のことである。『紫式部日記』によると紫式部は幼い時から父為時に訓育され、宮中で「日本紀の御局」と呼ばれたり、彰子中宮に『白氏文集』を講読するくらいの才女であった。しかし、紫式部は中宮彰子が実家の土御門邸で皇子を出産するために里帰りしている間、華麗な行事などを描きながらも水に浮かんで楽しそうに遊んでいるように見える水鳥も実際はわが身と同じように苦しいだろうと思っている。また一条天皇の行幸を迎える華やか船樂が催される場面でも、紫式部の目は御輿を担いで来た駕輿丁の苦しそうな姿と自分の立場を觀照するくらい内気で物陰に隠れようとした性格であったようである。

紫式部は堂々と同僚の女房を批判したり、実人生では遂げられなかった理想的な恋愛を『源氏物語』の中で描こうとした。そして彼女は宮仕えについても「憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまるるべかりけれ」（p.123）と述べ、日ごろの憂鬱な気持ちも立派な中宮彰子のもとに仕えていると忘れられるのが自分でも不思議であると書いている。すなわち、紫式部は清少納言がプライドともつと同じく彰子中宮に仕えていることに自負していた。

『紫式部日記』には、藤原道長が中宮の前にあった『源氏物語』を見て、紫式部に冗談を言うついでに梅の下に敷かれた紙に和歌を贈答する場面がある。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ
たまはせれば、
「人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけむ
めざましう」と聞こゆ。（p.214）

紫式部が和泉式部のように色好みだという評判はなかったが、道長は『源氏物語』の内容から当て推量で詠んだものであろう。これに対して紫式部の返歌は、自分は好き者など

²⁴ 清水文雄 校注『和泉式部集和泉式部続集』岩波書店、1985年、p.46

ではない、真に心外だという反応を見せている。ここで注目したいのは、平安時代の宮中では主従関係にある男女がこのようなやりとりを交わすことが自然に行われていた点である。もし朝鮮王朝の宮女がこのようなことをしていたら直ちに退出させられ、貴族は処罰されたであろう。

赤染衛門も夫大江匡衡と死別した後、和歌など学問的教養の高さが認めれ藤原道長の妻倫子と中宮彰子に仕えた。『紫式部日記』でも「はかなきをりふしのことも、それこそはづかしき口つきにはべれ」(p.202)と認めているくらい、女流歌人として確固たる名声を確保していた。また菅原孝標の女は幼い時から『源氏物語』などを耽読し、物語の中の理想的な男性に巡り会えることを夢見ていた文学少女であった。そこで作者は32歳のころになって、周囲の勧めに従って祐子内親王家に出仕するがすぐに退出し、翌年の春ごろ橘俊通と結婚したようである。『更級日記』には作者14歳のころ、夢に清楚な僧侶が現れ「法華経五の巻をとく習へ」²⁵と言われたが、ただ物語のことばかり考えていたと述べている。彼女は若いころ「光の源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のようにこそあらめ」(p.299)と思っていたが、それを晩年になって反省している。すなわち、清少納言や和泉式部、紫式部、赤染衛門などは夫と離婚や死別した後、「家の女」として平凡な暮らしをするより華やかな「宮仕えの女房」²⁶を志向したのである。だがしかし、女流作家となったのは誰にもできるのではなく、宮仕えの体験と和漢の学問が必須条件であったといえよう。

6. 朝鮮時代の宮廷女流文学

朝鮮王朝の17世紀初から18世紀末にかけて成立した『癸丑日記』、『仁顯王后伝』の作者は「ある宮女」で、『閑中録』の作者は東宮妃の恵慶宮洪氏である。宮女と東宮妃の身分は雲泥の差があるが、三作品とも端雅な宮中体ハングルで書かれた宮廷女流文学である。韓国文学では一般に随筆のジャンルに分類しているが、物語的な主題構成によって歴史小説に分類する説もある。

上記の三作品はそれぞれ王位継承に纏わる政争、悲劇の主人公となった王妃と王子の運命を傍で目撃し、事件(土禍)の一部始終を赤裸々に描いている。特に仕えている主人が党派争いの嵐の中で逆賊の濡れ衣を着せられ、流罪になったり殺されたりするくんだりでは氣を揉まれる思いで宮仕えをしていた様子が伺われる。当時は党派政治に絡んだ宮中秘話を記録することは甚だ危険なことで、筆禍事件にでも巻き込まれると三族(父、母、妻)が絶滅される危機にさらされることもあった。

『西宮録』ともいう『癸丑日記』は、1608年に即位した光海君(在位1608~23)が義母に当たる仁穆大妃を西宮に幽閉し大妃の幼い息子永昌大君(1606~14)を殺すという秘話の一部始終を大妃側の「ある宮女」が綿密に記録したものである。日記の癸丑年(1613)に大北派が光海君に、仁穆大妃の父金悌男が孫の永昌大君を王位につかせようとしている

²⁵ 犬養廉 校注『更級日記』(『新編日本古典文学全集』小学館、1994年)p.298

²⁶ 菊田茂男「家の女一蜻蛉日記」(『国文学』学燈社、1975年 12月)

と讒言し、金梯男父子を大逆罪で賜死させ、永昌大君を江華島に安置して殺させる悲劇を会話体を交えた文体で書かれている。そして1623年の仁祖反正で、仁穆大妃が復位されるという数奇な運命をある宮女の視点で写實的に記録している。『癸丑日記』には宮女たちの暗闘が党派争いの代理戦のように展開されているが、尚宮金介屎など光海王側の宮女たちの陰謀で、仁穆大妃に仕えていた宮女三十余人がそれぞれの理由で刑罰を受けたりした事件がこと細かに記されている。たとえば、癸丑年11月には宮女中環が厄除けに獅子経などの経典を読ませた後、金介屎と企んで仁穆大妃が王の死を拜んでいたと讒訴する。

癸丑年（1613）正月には、光海君の岳父・柳自新の妻鄭氏が宮中に入って娘と画策し、白い子犬のお腹を切り、弓を射るなど様々な呪詛をする。士大夫官僚の家柄でもわが孫の東宮を守るためには、禁忌であった迷信行為もやってのけたのである。そして宮女たちが経典を諺文（ハングル）に直して読んだことや、センボクという尚宮は一字の諺文も書けないくらい無学なので何の役に立たないと非難したりする。

『仁顯王后伝』は、肅宗王（在位1674～1720）の仁顯王后が張禧嬪の嫉妬で一度宮中から追い出されるが再び復位されるという伝記風の記録である。肅宗王は子宝に恵まれない仁顯王后より王子昀（景宗）を産んだ宮女張氏を寵愛するようになる。張氏は「悪賢く要領がよいので上意に迎合する」（p.20）女性で、宮女から禧嬪になり王妃となった。肅宗王は張禧嬪の嫉妬と知っていても、その色香に迷って、1689年仁顯王后を宮中から追い出して廃位させる。ところが、肅宗王は五年後の1694年に自分の過失を反省し再び仁顯王后を復位させ、張氏はもとの禧嬪に降下させる。そして1701年に仁顯王后が亡くなった後、張禧嬪が住んでいた就善堂から仁顯王后を呪詛した様々な悪事が発覚される。肅宗王は張氏の邪悪さに激怒し、張禧嬪とその兄張希裁を賜死させる。この事件には王位継承と政治的派閥争いの問題も絡んでいるが、作者は波乱万丈な仁顯王后と張禧嬪の生涯を「輪廻応報を現世で見る」（p.93）という仏教の世界観で捉えている。

『閑中漫録』、『恨中録』、『泣血録』ともいわれる『閑中録』は、作者恵慶宮洪氏（1735～1815）が世子嬪となった9歳（1744）から71歳（1806）までの波乱万丈な人生を自叙伝風に記録したものである。作者は夫思悼世子が英祖大王（在位1724～76）によって米櫃に閉じこめられ餓死した変故から33年も経って、還暦を迎えた年（1795）に起筆している。全体の内容は六編に分けられるが、第一篇には作者の幼い時から世子嬪としての宮中生活、第二、三篇には思悼世子が幼いころに冊封され、病、微行など、第四、五篇には実家の没落と父親の賜死、第六篇には正祖の孝心、作者の恨みと慟哭、水源陵への墓参りなどが書かれている。

特に第一篇には、実家の甥の要請でのんびりと筆をとって幼い時から約50年間宮中で体験した波乱万丈な人生が記されている。恵慶宮洪氏は王世子嬪に選ばれ、親戚ばかりでなく父親までが自分に敬語を使うのが不安で悲しみが込み上げ面白いことは何もなかったと述べている。恵慶宮洪氏が宮中に入る日が決まった後、遠い親戚が来て「宮中とは極めて厳格なところだそうで一度入ったら生涯の別離になる」（p.24）と忠告した。この記事は宮

仕えに対する一般の認識がどんなものであったかを物語っている。後の五篇には、作者の息子正祖が亡くなった後に筆を起し、孫の純祖に実家の無実と名誉回復のために思悼世子事件の一部始終が切実に述べられている。『閑中録』には全編にわたって「悲しみ」や「恨み」などの表現が散見され、第三編の末尾には、次のようなことが述べられている。

そのうちどうしても言えないことの中で、また本当に言えないことは書けなかったことが多かった。私の髪の毛が白くなってから書き上げたことを考えると、人間とは我慢強いものだね。呼天痛泣して自分の運命を嘆くだけである。(p.163)

恵慶宮洪氏は夫思悼世子の変故を「悲しい」、「恨めしい」などと書いている表現が多用されていることから、書名を『恨中録』ともいう。特に後半は父洪鳳漢が初めて科挙試験に及第して英祖大王に重用されたこと、仲父洪麟漢が最高官職である領議政になったこと、また讒言で父親が逆賊となり仲父が正祖によって賜死させられたこと、弟が配流地で死んだことなど、実家が没落する恨みを私小説風に述べている。金用淑は『閑中録』などに現れた韓国女流文学の特質を、「恨みは実家を思い、自分自身を考えるモチーフから生まれたものでも、窮極的にその原初的遡源は女性という運命論に帰着する」²⁷と述べ、それをまた「孝」の問題と結びつけて考えている。すなわち、『閑中録』の後半は、作者が血の涙を流しながら慟哭する「恨み」を露呈し、儒教的な親孝行を建前にして孫の純祖に実家の無実を訴えるために記録したものといえよう。

以上のように朝鮮は崇儒排仏が国家の基本理念となっていたが、ハングルで書かれた宮廷文学には従来のシャマニズムや仏教などが儒教と習合された形で描かれている。日韓の女流文学は時代差があるにもかかわらず、作者は中流貴族出身で仮名文字とハングルの教養を備えて日記、随筆、物語などを創作している。そして平安時代の女流文学は恋愛や趣味、娯楽、美意識などを取り上げているが、朝鮮王朝の宮廷文学は宮女や妃嬪が宮中で目撃した王位継承にまつわる歴史的な事件、主家の栄華と没落などが書き込まれている。

7. おわりに

平安時代と朝鮮時代は、仏教と儒教、摂関政治と科挙制度などのように、その文化と体制が異なるだけに宮廷文学の特徴も違う。しかし、女流作家による宮廷文学が固有文字で書かれているという点は全く同じである。朝鮮王朝の宮女はハングルを持って随筆や時調、小説などを創作し、平安時代の女房は仮名文字で日記や随筆、和歌、物語などを作り出している。

平安時代の女房たちは、新羅の郷歌式表記法とも繋がりが指摘される万葉仮名を利用して仮名文字を発明する。仮名文字が一般庶民にまで広がった時に、朝鮮時代の申叔舟と姜

²⁷ 金用淑『朝鮮朝女流文学の研究』淑明女子大学校出版部、1979年、p.42

* This work was supported by Hankuk University of Foreign Studies Research Fund Of 2014.

沆はそれぞれ京都と江戸の男女が自由に仮名文字を使っている状況を朝鮮の朝廷に報告している。すなわち、日韓両国の女流文学は仮名文字とハングルの発明によって創作されるという共通点がある。平安時代の女房は漢詩漢文を知っているにもかかわらず知らないふりをしていたが、和漢の学問に精通して宮仕えをし、またその経験を生かして宮廷文学を書き残すことができたといえよう。朝鮮王朝は儒教社会だったので倫理と諸法度が重視されたが、宮中に勤めていた宮女は思いもよらない事件に遭遇し、それをハングルで書き残したのである。そして両国の女流作家は自分の筆跡を残すことに引け目に感じながらも、書かずにはいられない内的欲求が表出された時、固有文字で繊細な感性と美意識を描写したのである。宮廷女流作家となった女房と宮女たちは最高の教養を体得していたし、特に平安時代の女房たちは宮仕えに高い自負心を持っていたようである。平安時代の女性教養は普通、習字や和歌、音楽などであったが、宮廷作家となった女房は漢文をはじめ様々な教養を身につけている女性を選ばれることが多かった。

両国の宮廷女流文学は時代のずれと文化的背景も異なるが、朝鮮の宮廷文学は儒教的思想のもとで党派の政争や女性の恨みなどが描かれ、平安時代の女流文学は仏教思想のもとで有職故実や美意識、私的な恋愛などが多く取り上げられている。そこで宮廷文学の特徴は両国とも女流作家の立場から人間の道理、倫理風俗、結婚制度などに厳しい目を向けて社会を批判している。すなわち、両国の女流作家たちは当時の倫理や社会制度に対して相対化した自我を発信することで生きがいを求めたのではないかと思われる。